山形市平清水陶磁器産地の存続基盤

初　沢　敏　生

Ⅰ．陶磁器業産地研究の意義

1．陶磁器業産地の存続基盤

地場産業は全国各地に様々な産地を形成し，生産を進めている。各産地はそれぞれ，その地域の歴史的背景などの影響を受けながら，独特な社会的分業体制に基づく，地域的生産体系を形成している。

陶磁器産地の多くは江戸時代に起源を持ち，長い歴史を持っている。陶磁器生産においては局地的原料に依存することが多いため，生産技術や製品には産地によって大きな違いがある。そのため，産地の持続に必要な技術伝承・後継者育成や原料・市場の確保などは基本的に産地を単位として行われてきた。すなわち，産地の生産構造そのものが，その存続基盤の一環を形成してきたのである。

しかし，陶磁器業においても産地の発展は単調なものではなく，一部に大きく成長する産地がある一方で，多くの産地がその姿を消している。陶磁器業も他の産業と同様に，生活様式の変化や技術革新，国内外の産地・企業との競合などを通して絶えざる革新の波にさらされ，生産構造の再編成を続けている。すなわち，陶磁器業産地においては伝統の継承と構造の革新の双方が同時に存在しているのである。

2．研究視点の設定

陶磁器業は上記のような特徴を持つため，これまでの研究の蓄積は多い。まず，陶磁器業の全国的な分布と製品別地域構成については上野(1979)が検討している。また，主に瀬戸および東濃地域に展開する陶磁器業を事例として辻本（1978），北村（1981）などが地域間分業の形成と生産構造の特徴，およびその変容等について研究を進めている。下平尾（1973；1978；1985；1993）はその一連の研究によって有田・波佐見産地の生産構造とその変化について詳細な分析を加え，野原（1986）は地場産業の存立基盤である社会的分業体制の構造について分析を進めている。

しかし，これらの研究の多くは瀬戸・東濃・有田などの大産地を対象としており，小規模な和食器産地を対象としたものは少ない。これは，和食器（特に陶器）が大量生産に向かずに参入が容易であるため，小規模な産地が分散的に立地していること，和食器産地は他の陶磁器産地に比較して最も規模が小さく，生産性も低いこと，それに社会的分業体制も未発達で，歴史的段階も下位に位置づけられていることなどによる（上野：1979)。

しかし，1960年代の民芸ブームの後，各地の小規模な和食器産地はその地域的な特性に合わせて独特な発展を遂げてきている。各産地の製品や生産構造には大きな差異があり，技術伝承の形態も異なる。ところが，この分野の研究では，宮川（1996）による砥部焼産地の研究が見られる程度で，必ずしも十分とはいいがたい状況である。

筆者はこのような問題意識の下，これまでに茨城県笠間産地，福島県浪江産地，福島県本郷産地等の実態調査を進め，それらの地域の生産構造や職人の技術習得等について検討し，その地域的な差異を明らかにした（初沢：1995)。しかし，研究はまだ著についたばかりであり，さらに多くの事例研究を積み重ねていくことが必要である。そこで，本小論においては山形市の平清水産地を事例として検討を加えることにしたい。

平清水産地は，窯元わずか6軒のきわめて小規模な産地である。そのため，前述のような視点からこの産地を取り上げた研究はなく[1]，わずかにその歴史や民俗に関する研究がいくつか見られ

る程度である（真壁：原著年不詳，山形市教育委員会：1965，長井：1973）。しかし，技術伝承等に関する産地存続基盤の解明を進めるにあたっては，平清水産地は好適な事例の一つであると考えられる。その理由としては，①平清水産地では基本的に産地外からの参入が見られず，産地内における技術伝承の状況を検討するのに適していること，②市場構造の変化にともなう生産構造・製品の転換を経験しており，産業の構造転換にともなう産地の持続性について検討することができること，③①と②を結び付けて研究することにより，構造転換にともなう技術伝承の変化について検討することができること，などが指摘できる。以下，平清水産地について上記の視点から検討することにしたい。

3．平清水産地の概要

平清水産地は，山形市市街地の南東約4㎞の千歳山山麓に位置する。同地では寛政年間から土焼が始められたと伝えられている。しかし，当初は技術力がともなわず，日常の使用に耐えうる製品を製造することはできなかった。平清水で陶磁器生産が本格的に開始されるのは天保年間のことである。真壁（原著年不詳）によれば，水戸出身の陶工藤治平が笠間（一説によれば相馬）の技法を平清水に伝え，それを契機として本格的な生産が開始された。さらに文政年間には安倍覚左衛門が相馬の技術を伝え，弘化年間には肥前の陶工伊助が磁器製造を始めた。この後，平清水は陶器・磁器双方の製品の生産にあたった。

明治期に入ると瓶・擂鉢・食器等の日用陶磁器や衛生陶器の生産が盛んになり，明治30年代には約30の窯元が立地，東北地方最大の産地の一つと言われた。しかし，1901年に奥羽本線が開通すると西日本の産地から安価で品質の良い製品（特に磁器）が流入するようになり，明治末頃より平清水産地は縮小に向かう。昭和戦前期には窯元は10余に減少，戦後は一時期4窯にまで減少したが，2窯が新たに独立し，現在は6窯となっている。

主要製品は1960～70年代に民芸調の和飲食器に転換，現在では瓶等の生産は行われていない。また，作家を希望する窯元も増えている。

Ⅱ．平清水産地の存続基盤

陶磁器業産地の持続性を考えるにあたっては，以下の3点に留意する必要がある。

まず，最も重要なのは技術の伝承である。技術の伝承は，狭い意味での生産技術の伝承に限定されない。生産業者としての様々な心得や広義の「生き様」の伝承などもこれに含まれる。今回事例として取り上げる平清水産地においては大規模な産地に見られるような公的な技術伝承機関がなく，「家」または「師匠」がその役割を果たしている。産業，産地の継続性を検討するにあたっては，まず，この点を把握することが必要である。

次に取り上げなければならないのは原料である。一般に陶磁器業は，良い土石のあるところに立地する原料立地型の産業であるとされてきた。近年は他産地あるいは外国から原料を購入して生産にあたる企業が増加しつつあるが，依然として地元原料の持つ意味は大きい。この傾向は民芸産地において特に顕著である。しかし資源は有限であり，特に良質の原料は既に入手がかなり困難な状況になりつつある。このような中で原料をどのように選択するかは，産地存続の重要なポイントとなっている。

また，市場の確保も重要である。いかに良い製品を生産しても，それが市場に受け入れられるものでなければ経営は成り立たない。陶磁器生産は技術革新や生活習慣の変化の影響を受け，製品の転換を通して新たな市場を開拓してきた。しかし，製品の転換は製作者のものづくりマインドや技術の伝承形態，原料の選択などにも影響を与えており，産地の存続基盤を変容させる可能性も持っている。

本小論では，山形市に立地する平清水陶磁器産地を上記の視点から分析し，産地の存続基盤の構造を検討する。

1．平清水産地における技術伝承

ここでは聞き取り調査によって得られた各窯元の製作者の技能修得の方法から，平清水産地における技術伝承の特徴について検討することにしたい。

A氏は1921年生まれ，実家は代々陶磁器業を営んでおり，A氏も1936年頃より従事した。当時はインゴベ[2]の和食器を生産していたが，新入りはまず3～4年間，土練りの修業をしなければならなかったため，土練り以外の仕事はさせてもらえなかった。そのうちにA氏の実家は土管生産に転換（1940年），A氏も出征して日用陶器の修業は中断した。

A氏は復員後，家業の土管生産に携わった。当時，土管は胴の部分は機械で生産していたものの，ソケット[3]の部分はロクロで成型していた。A氏はこの仕事を通してロクロ技術を修得した。ただし，1955年頃よりソケット部も型で作られるようになる。

A氏の家では1973年まで土管の製造の専業で行ってきたが，公害問題（煤煙等）から登り窯が使用できなくなり，灯油窯に転換せざるを得なくなると窯の容量が減少し，より小型で価格の高い製品に転換することを迫られた。これを契機としてA氏は民芸品生産を開始した。土管と民芸品では生産技術が大きく異なるが，当時はA氏の父がまだ健在で，戦前の経験を生かしてA氏に対し様々な指導を行った。A氏自身も戦前・戦後の修業の経験を生かして民芸品生産にあたり，失敗を重ねながらも技術を修得した。

B氏は山形県天童市の出身，実家は窯業とは関係なかったが，戦後，山形師範予科を中退し，現在の窯に弟子入りした。その後，婿養子として家を継ぐ。B氏が弟子入りした頃，窯では湯飲みなどを中心とした製品を生産していた。先代は九谷で修業し，上絵付けをした製品を生産していたが産地の作風に合わず，生地の改良にあたった。その結果，青色で表面にひびの入った青磁風の陶器の開発に成功，平清水を代表する製品となった。

当時，窯では和飲食器を中心とした製品を生産していたが，B氏は作家の個展を見て別の世界があることを知り，作品の製作を志望，1960年頃より展覧会へ作品を出展し始めた。しかし，先代が作品の製作などに反対したため，技術等は我流で修得した。主に壺等の製作にあたったが，陶器生産の基礎を修得していたため，あまり困難はなかった。

B氏は現在も和飲食器生産と作品製作の双方を行っている。これは企業としては和飲食器生産を継続すべきであり，作品製作はあくまで個人として行うものであるとの考えからである。B氏は産地全体のレベルアップとイメージアップのために良い作品を創ることが必要であるが，それだけでは産地は成り立たず，日用品の生産を継続することが重要であると考えている。そのため，作家志望の弟子は取っていない。

C氏は1947年生まれ，実家は代々窯元を営んでいた。三男であったが，二人の兄が家を出たために窯を継いだ。

製造技術に関しては父はあまり教えてくれなかったため，山形県川北町にあった山形タイルや山形県の工業試験場などに通い，勉強した。また，20代の頃は東京の美術館を巡って様々な作品を見て歩いた。しかし，それだけでは十分な技術を身に付けることができなかったため，主に釉薬の作成にあたった。当時，千歳山から採取される原土の質が変化し，以前から用いられてきた釉薬が適さなくなっていた。そのため，C氏が勉強した化学の知識を用いて新しい釉薬を開発して提供した。C氏は25，6歳からロクロを担当するようになり，その後はロクロを専門に扱い，今は逆に素材の色を出すように工夫している。

C氏はロクロについても父から細かな技術を伝授されることはなかったが，子どもの頃家で働いていた職人の記憶が残っており，それを思い出しながら自分で工夫した。その意味で，窯元の工場で育ったことが良い経験になっている。ただし，平清水産地全体で見ると，技術の蓄積はあまり大きなものではない。例えば，C氏は現在，茶器の生産を行っているが，平清水産地には茶器生産に

関するノウハウは全く蓄積されていない。C氏は自ら茶道をたしなみ，それを作品に反映させるなどの努力をしているが，伝統的な茶器産地では常識となっているようなノウハウでも一つ一つ時間をかけて開発しなければならず，その負担は大きい。現在においても伝承技術の地域差は非常に大きい。

D氏はC氏の叔父にあたり，平清水の窯元の家に生まれた。実家で陶器生産に関する技能を修得したが，家は兄が継いだためにD氏は陶芸作家としての道を歩んだ。しかし陶芸界のあり方に疑問をもち，1956年に独立したのを契機に身を引く。それ以降は気に入った仕事だけを受けて生産している。

D氏は技術伝承に熱心で，これまでに15人の弟子を育てている。これは若い後継者を育てることが先輩の務めであると考えているためである。弟子の多くは独立後他産地などで活躍している。

E氏は1955年生まれ，平清水の出身であるが，実家は窯元ではなかった。しかし，たまたまD氏と知り合って22歳の時に弟子入り，1993年に独立するまで16年間D氏のところで勉強した。D氏からはロクロの技術を教わったが，それ以外のことはほとんど独学で修得した。E氏は産地単位での技術伝承については，その効果を疑問視している。ロクロ技術には個人差が大きく，組織的な教育には適さない。また，釉薬に関してはむしろ化学の勉強の方が重要である。E氏はこのような技術的な面よりも，陶器や仕事に対する考え方などの伝承が必要であると考えている。E氏はその意味で，公的機関による教育よりも，能力のある個人に弟子入りし，様々な経験をつむことを重視している。しかし，現在は弟子に給与を支払わなくてはならないため，弟子を取ることは難しい。E氏も弟子を取るつもりはない。

F氏は1922年生まれ，実家は明治の初めに開窯した窯元だった。尋常高等小学校卒業後，実家で働き始める。F氏は跡取息子だったので，土練り，ロクロ，釉薬など焼き物に関する技能を父から次々と教え込まれた。当時，F氏の実家では，鉢，瓶，播鉢，植木鉢，衛生陶器などを生産していた。F氏は1942年に入営するが，それまでにこれらの生産に関する一通りの技能を修得していた。

戦中から戦後にかけては，平清水産地内の窯元の多くが土管生産に転換したが，F氏の実家では労働力不足のため，瓶などの日用品を生産していた。この頃，B氏の家の下請生産を行ったことを契機として磁器生産の技術を修得する。さらに1971年，福島県大堀産地の人から紹介されてガス窯を導入，生産品種を小物中心とし，陶芸教室なども行うようになる。

F氏の窯は，既に息子が継いでいる。息子は入婿で焼物の経験はなかったが，従業員が様々な技能を教えた。

以上，平清水産地の6窯元の製作者がどのような技能伝承を受けてきたのかを概観した。いずれも産地内で技能を修得しており，その期間は数年程度のものが多い。かつての徒弟制の時代には，陶磁器製造の技術を修得するには長い年月が必要であるとされていた。A氏もそのような教育を受けている。しかし，A氏とほぼ同時期に教育を受けたF氏は数年間でほぼ全工程の技術の習得を終えている。また，F氏の息子は他の従業員の指導を受けただけで，比較的短期間のうちに技術を修得している。このことは，陶磁器業においても数年あれば基本的な技術が修得できることを示している。いくつかの産地で実施されている研修講座等は，この部分の役割を担うものである。

しかし，このような方法で修得できるのはあくまで基礎的な技術だけであり，そのことによって直ちに製品を生産できるようになるわけではない。特に日用陶器の生産が大企業によって占められ，また安価な輸入品が急増する中で，現在，中小の窯元は民芸的な製品の生産に重点を置く傾向が強い。このためには個性ある製品を作るための技術修得が不可欠であるが，これは短期間では不可能である。B氏，C氏，E氏はこの点を特に強調している。従来，産地における技術伝承については基礎的な技術の伝承・修得のみが強調され，その後のことについてはほとんど取り上げられること

はなかった。この理由としては，自立後（基礎技能の修得後）の修業は個人の責任であるとの考え方が根強いこと，産地の集積が各種のインフォーマルな研修グループを自然発生的に生み出し，それが技術の伝承と修得，さらには新しい技術の開発に大きな役割を果たしてきたことなどが考えられる。E氏が指摘するような「よい師匠への弟子入り」もこの一類型としてとらえられよう。このようなつながりが産地の技術伝承に重要な役割を果たし，産地の特性を生み出してきたのである。

このように，産地における技術伝承には大きく分けて2つのタイプのものがあり，両者が結びつくことによって，初めて製品を作ることが可能となるのである。このうち，基礎的な技能の修得については比較的短期間で可能であり，それを支援する公的機関も各地に存在する。しかし，その後の製品化にあたっての研修等は個人的な努力にゆだねられる場合が多く，それを産地の様々な機能が補完してきた。技術伝承面における産地の存続基盤の根幹は，まさにこの点にある。産地の集積とそこに積み重ねられた伝統がこれを支えているのである。

しかし，近年の経済構造の変動は産地の存立基盤と枠組みを揺さぶり，その技術伝承基盤も変質しつつある。かつてのような「弟子」を育てるという形を通しての産地内での人材育成システムは既に崩壊し，産地内での職人の再生産は困難な状況となっている。前述の公的機関による基礎技能の伝承は，これへの対処の一つであろう。ところが，産地の存続基盤の根幹であるその後の研修機能については，多くの産地で弱体化が進んでいるにもかかわらず，ほとんど対応がなされていない。これは平清水産地のような小規模な産地においては，特に深刻な問題となっている。

現在，多くの製作者は，これを補うため他産地の製作者との交流を進めている。この傾向は産地の集積を生かすことが難しい作品を重視する製作者に顕著で，平清水産地においてもB氏，C氏，E氏などは既に多くの成果を上げている。B氏が指摘するように，個々の製作者が力量を高めることにより産地のイメージアップと活性化を図ることは，有効な方法の一つである。しかし，他産地との結びつきの強化は，一方で産地の特徴を薄め，産地内の企業の結びつきを弱めさせる危険性も持っている。両者の均衡を取りながら産地の発展を図ることが必要である。

2．平清水産地で取り扱う原料土石

陶土・陶石の存在は陶磁器産地が成立するための条件の一つであり，大部分の産地は原料地立地を示す。しかし，近年は輸送機関の発達により，必ずしもそのような動向を示さなくなってきている。そこで，次に平清水産地で用いられている原料土石について検討することにしたい。

平清水産地は，産地が位置する千歳山から採取された原料土石を基に陶磁器生産を行ってきた。原料土石の採取地は国有の自然休養林の中にあるため，産地の各窯元で組合を組織して採取している。採取は各窯元にまかされているが，採取量は全体で年間12㎥までと定められており，量的な規制は厳しい。

また，質的な問題も深刻である。平清水産地では，江戸時代から千歳山の土石を採取しつづけてきたため，現在では良質な土石を十分に確保することは難しくなってきている。特に平清水焼の特徴となっている白泥の入手はきわめて困難な状況である。そのため，各窯元は原料土石に様々な工夫を凝らしている。以下，いくつかの窯元の使用している原料土石の特徴について紹介する。ただし，原料土石の配分構成などについては企業秘密に属することも多いため，ここでは概要を示すにとどめる。

A氏は地元産の原料にこだわり，基本的に千歳山の土石しか使用していない。これは修業を始めた当初からずっと地元産の土石を使いつづけてきたためで，豊富な地元の資源を生かし，昔からの伝統を引き継ぎたいとの意欲が強い。しかし，注2）にも示したように，千歳山の土石には鉄分が多く含まれるため，どうしてもそれがシミになって残る。A氏はこれを「インゴベ」によって隠し

たり，ふるいで鉄分をできるだけ除去した上で，残りのシミを模様のように見えるように工夫するなど，製作上の工夫によって原料土石の欠点を補うように努力している。

F氏はA氏と同様地元の土にこだわり，使いつづけてきた。しかし，1960年代半ばから地元産の土の質の低下が顕著になり，これだけで製品を製作することが困難になった。そのため，次第に他産地の土を混ぜて使用するようになり，現在は地元産の土8割に名古屋から取り寄せた土を2割程度ブレンドして使用している。

これに対し，E氏は地元の土石は全く使用していない。これはE氏が志向している作品を作るために，地元の土石が合わないためである。E氏は，土石が作家の個性を引き出すために最も重要な役割を果たしており，特徴的なものを使用することが必要であると考えている。E氏は中国青磁風のものを作りたいと考えているため，原料陶石も中国から取り寄せて使用している。

以上，タイプの異なる三氏の事例を紹介した。平清水産地においても他産地の原料土石を使用する傾向が強まってきていることがわかる。聞き取り調査によれば，全体では地元産の土石の使用割合は半分程度ではないかと推測されている。このような地元産原料の使用の縮小は，大きく分けて二つの理由による。その一つは，資源の枯渇にともなう質の低下である。言うまでもなくあらゆる資源は有限であり，同様の傾向は他産地でも見られる。これに対処するため，例えば有田産地では，工業試験場などが中心になって原料土石から不純物を取り除き，質を向上させるための研究などが進められている。平清水産地においては，現在のところこのような動きは見られないが，原料土石の改良などは個々の窯元では十分に対応することは困難であり，公的研究機関等の支援が必要であろう。

もう一つは製品の多様化にともなう原料土石需要の変化である。詳細は後述するが，現在，平清水産地においては各製作者が独自の作品の製作を追及する傾向が強まっている。ある製品（作品）には，それに適した原料土石があり，千歳山の土石だけでこれに対応することは困難である。かつては土石の特徴が各産地の独自性を生み出していた。しかし，このことは製品の転換が必然的に原料の転換を求めることを意味しているのである。

平清水産地においては，他産地から原料土石を購入することは，このような理由からやむをえないことであると考える。しかし，原料土石は製品の性格を方向付ける重要なものであり，地元産原料が使用されなくなることは，産地の個性を喪失することを意味する。研究機関等の支援なども含め，対応を検討していくことが必要である。

3．平清水産地における製品とその流通の特性

平清水産地においては，前述のように瓶・擂鉢・日用食器等が多く生産されていたが，戦後の生活様式の変化にともなってこれらに対する需要が大幅に減少，生産品種の転換を余儀なくされた。同様の傾向は国内の多くの産地で見られ，この中で少なからぬ産地が姿を消していった。このような動きの中で平清水産地は民芸品産地へと転換していったが，これにあたり，産地の流通構造も大きく変化した。ここでは，産地存続の大きな条件の一つである製品とその流通の特徴について検討することにしたい。

ここでは，まず窯元の製品と流通の特徴について紹介する。

A氏の窯では，既に紹介したように1973年に登り窯が使用できなくなったことを契機として土管生産から民芸品生産へと転換，和飲食器一般の生産にあたっている。平清水産地では，かつての瓶等を取り扱っていた問屋が1960年代まで活動を続けていたが，その後は産地問屋に類するものはなく，各窯元が独自に販路の開拓にあたらなければならなかった。A氏の窯では，製品の一部を山形県の観光物産館で販売している他は，ほとんどを自家で販売している。これは，千歳山と平清水産地が山形市の観光名所の一つであり，多くの観光客が訪れるためである。A氏は販売上からも，産地の集積のメリットが大きいことを指摘している。

B氏は，A氏と同様，民芸調の和食器を中心に生産しているが，「梨青磁」「残雪」などと命名される青磁，白磁調の新しい技術を用いた製品を開発しているため，市場の評価も高い。市内のデパートなどに出荷しているほか，記念品などの生産の依頼も多く受けている。また，直接窯元に足を運ぶ消費者も多く，販売活動は活発である。加えて，前述のようにB氏は作品の製作も行っているため，個展等における販売もある。今後は個展等での販売を拡大していく予定である。

C氏は湯飲みなどの工芸品を中心として生産している。A・B両氏と同様，観光客等への販売や記念品等の生産の受注も行っているが，収入の中心は陶芸教室である。これは，C氏がまだ自分の作品に満足しておらず，自分の勉強のためにできるだけ多くの時間を割きたいと考えているためである。そのため，C氏は販路の拡大等は現在のところ考えていない。

D氏は，現在余り生産活動を行っていないため，ここでは除外する。

E氏は作品の製作が中心であり，基本的に青磁の壺を作成している。自宅を店にしているが，価格が高いために一般の観光客への販売はほとんどない。毎年個展を開いてそこで販売することに中心を置いており，自宅の店に買いに来る客は，ほとんどが前にE氏の作品を購入した経験をもつリピーターである。作品中心の販売のため，市場はどうしても東京中心となり，地元での販売は少ない。

F氏の窯では民芸風和飲食器の生産を中心としているが，ここで特徴的なのは陶芸教室を大規模に行っていることである。F氏は1969年頃から陶芸教室を始めていたが，1989年に350人が一度に製作できる体験教室を建設，大々的に陶芸教室を行うようになった。陶芸教室は，当初，最低限の収入の確保を目的としていたが，これにともなって知名度も上昇し，店を訪れて製品を購入する客も増加するようになった。そのため，現在では一部の注文品を除けば，陶芸教室と自家販売以外の販売は行っていない。バブル期は陶芸教室の収入と自家販売の収入が5：5程度であったが，現在は観光客の減少などにより，4：6程度になっている。

以上，5氏の製品とその流通構造の特徴について検討した。ここで注目されることは，個展等での販売と県の物産館を除けば，デパート等の販売店に製品を卸している窯元はB氏以外にないことである。これは産地問屋が製品の転換に対応できないまま姿を消してしまったことの結果であると考えられる。前述のように，各窯元は独自の努力によって製品の転換に成功したが，新たな販路を開拓するには至らなかった。このことが，平清水産地の発展を大きく制約している。

これを補っているのが観光客等への直販である。長い歴史と伝統は平清水産地の高い知名度を維持し，現在も多くの観光客が訪れている。これらの観光客への直販が，窯元の経営の維持に大きな役割を果たしている。このような傾向は他産地でも見られるが，平清水産地は窯元がわずか6軒（うち1軒は休業に近い状態）と産地の集積が小さく，また核となる施設もないため，観光客にとっての魅力は大きなものとは言いがたい。現在はB氏が指摘するように何人かの著名な作家が産地のイメージアップを図り，そこへの訪問客が産地全体を活性化するという構造になっている。

このように，平清水産地においては，窯元によって生産品種が異なる上に，流通・販売体制が十分に整っていない。今後，産地の振興を図るためには，この点の整備が必要である。

Ⅲ．平清水産地における産地存続基盤とその課題

以上，平清水産地における産地持続システムの特徴について，技術伝承，原料，製品・流通の各方面から検討を加えた。ここで明らかになったことは，以下のとおりである。

まず，技術伝承についてみると，陶磁器製造に関する基礎的技能については，家や窯を単位とした教育が行われており，産地存続基盤が機能して

いることがうかがわれる。しかし，その上に積み上げられるべき個性ある製品を作るための技術などについては，平清水産地のような小規模な産地では産地内での伝承は難しく，各窯元が産地の枠を超えて交流し，研鑽を積んでいる。

原料土については，かつては千歳山の土石に依存して発展した産地であることもあり，地元の土石にこだわる窯元も多い。しかし，平清水産地においては原料土石の埋蔵量の減少にともなう質の低下が顕著であり，地元産の陶土・陶石だけでは質の高い製品を作ることが困難になってきている。また，窯元の製品の多様化にともない，必要とする土石の質も変化しており，他産地の土石を購入せざるを得ない状況となっている。

製品は各窯元が特徴のある作品や民芸品の生産にあたっており，産地の特徴は薄れつつある。また，流通についてみると観光客などへの直販の占める比率が高く，デパート等への小売店へはほとんど卸されていない。これは以前存在した産地問屋が製品の転換に対応できないまま姿を消してしまったことによるところが大きい。このため，販路の確保が重要な課題となっている。

このように，これまで平清水産地の産地存続基盤を支えてきた各機能が，現在，その有効性を失いつつある。本報告では，技術伝承，原料，製品・流通の3点からこれについて論及したが，各機能は互いに独立して存在しているわけではない。例えば，新しい製品の開発は必然的に流通を変化させ，必要な原料と技術も転換させる。産地を振興させ，新たな産地持続システムを構築するためには，これらを総合的に再編成していかなければならない。

現在，平清水産地は産地としてのまとまりを失いつつあるが，原料の改良，市場の開拓，新しい研修システムの構築などは個々の窯元では対応できないことであり，産地あるいは行政なども含めて，取り組む体制を作ることが必要である。

本小論をまとめるにあたり，調査にご協力いただいた各窯元の皆様に感謝します。

本小論は東北地理学会2001年度秋季学術大会において行った発表を基に加筆修正したものである。

（受理日　平成14年4月10日）

注

1）平清水産地に関しては，羽田ほか（1990a）が本論中に取り上げたB氏と推測される窯元のインタビュー記録を掲載しているが短文であり，産地の生産構造を十分に解明するには至っていない。

2）千歳山から採取される土には鉄分が多く含まれるため，そのまま焼くと表面に星状のシミが多く現れる。そのため，上に泥で化粧し，シミを見えなくするような工夫がなされた。このような製品は，産地内では「インゴベ」と呼ばれている。

3）「ソケット」とは，土管の接合部の「口」の部分を意味する。

文　献

上野　和彦（1979）：わが国陶磁器工業の地域構成　新地理27－3

北村　嘉行（1981）：東濃陶磁器業地域の構造　東洋大学紀要20

下平尾　勲（1973）：『経済成長と地域産業』新評論

下平尾　勲（1978）：『伝統地場産業の研究』新評論

下平尾　勲（1985）：『現代地場産業論』新評論

下平尾　勲（1993）：『地域振興と地場産業』八朔社

辻本　芳朗（1978）：『日本の在来工業』大明堂

辻本　芳朗（1981）：『工業化の地域的展開』大明堂

長井政太郎（1973）：『新訂山形県地誌』中央書院

野原　敏雄（1986）：『現代の地場産業』新評論

羽田新ほか（1990a）：伝統工芸の現代化に関するヒヤリング記録(2)　明治学院論叢社会学・社会福祉学研究83

初沢　敏生（1995）：中小陶磁器産地の生産構造　行政社会学論集 7 －2/3
真壁　豊威（原著年不詳）：『平清水焼物の歴史』　山形市史編集委員会（1973）：『山形市史編集資料　32』所収
山形県教育委員会（1965）：『山形県の民俗資料』　山形県教育委員会

Sustaining Factors of Hirashimizu China Industrial Region, Yamagata City

HATSUZAWA, Toshio

The location of china industry is limited on raw materials, and its skills and goods are different from each industrial region. So, sustaining factors of china industrial regions (skill training, making sure of raw materials, finding new market, etc.) are succeeded by each industrial region. On this study, I have clarified the industrial structure and sustaining factors of Hirashimizu china industrial region, Yamagata City.

The most important factor to sustain industrial region is skill training system. On Hirashimizu region, basic skill of china industry is trained by each family or company. But there is not a high level skill training system. So makers keep company with makers on other regions, and learns new skills.

Raw materials －clay and stone－ are mined on Mt. Chitose －located on Hirashimizu region－, so many makers are particular about local materials. But, in recent years, the quality of materials has dropped. It is difficult to keep the level of goods if makers use only local materials. Many makers must use other regions' materials.

On Hirashimizu region, manufactured goods were changed to folk handicrafts in 1960s. But they could not find new market and distributive machinery is not prepared. Their main market is limited to tourists' demands. To make sure of market is very important.

The sustaining factors of Hirashimizu china industrial region are loosing their effect. On this report, I have examined about skill training system, raw materials and market. These factors are closely related with each other. To promote industrial region and re-organize industrial structure, we must exam comprehensively.